

『英和和英語彙』(1830)の編集に

用いられた近世日本の辞書類

— メドハーストの書簡に基づいて —

陳 力 衛

1. はじめに

19世紀の初頭において、ロンドン伝道会(London Missionary Society)は海外への布教を広げていた。その一環として1807年にロバード・モリソン(R. Morrison, 1782-1834)を中国に派遣している。しかし、当時の清朝では外国人の受け入れを厳しく制限し、通商の窓口を広東に限っていた。モリソン自身も宣教の目的では中国へ入れず、マカオを中心に活動していた。その後、イギリスの東インド会社の通訳として働き、はじめて広州の地に居を構えることが出来たわけである。

インドの恒川より東のULTRA GANGES(恒川外)に在留するロンドン伝道会の宣教師の最初の二人、マカオのモリソンとマラッカのミルン(W. Milne, 1785-1822)は早くも日本を視野に入れて日本向け布教の必要性から1817年11月2日に二人連名で決議文を発表していた(試訳を付す)。

非常に関心を寄せている重要な日本列島に関するすべての可能な情報を収集し、可能であれば、将来にその国を私達の何人かが渡航するために、その国の言語を学習し、『聖書』がどのような変更を経ればその国で役に立つことができるか、またはまったく新しいバージョンが必要かどうかを、把握する必要があるかもしれない。(Willam Milne (1820) 199-201頁)

陳(2017)で触れたように、イギリスは17世紀初頭に平戸に商館を設立したが、鎖国政策によって、撤退を余儀なくされてから長い空白期を経て、19世紀の初頭になってオランダがフランスに統治されたことに乗じて交易目的のために文化5(1808)年フェートン号の寄港が試みられた。当時の出島にいるオランダ商館長ドゥーフによって拒否され、日本に追い返されてしまった。

その日本向け布教の決議を受けてか、文政元年(1818)英国船(ゴルドン船長)がさらに江戸のほうへ向かった。この英国船の浦賀来航は、幕府にとって喉口に短刀をつきつけられたも同然で、これを契機に海防がより強化されていった。文政8(1825)年いわゆる異国船打払令が発令されることでますます交易が厳しくなった。

一方、同じロンドン伝道会に属するメドハースト(Walter Henry Medhurst, 1796-1857)は1817年7月12日にマラッカに渡り、ミルンの助手として、中国語雑誌『祭世俗毎月統記伝』の発行を手伝いながら、キリスト教文書などの出版を行う印刷所も運営していた。1819年にすでに福建語を身につけ、辞書編集を始めようとしていた。後にペナンへ、さらに1822年1月7日に華僑も多く入植しているバタビヤへと移り、1822年にミルンが没してからは、事実上、彼のいるバタビヤがロンドン伝道会の印刷拠点となった。彼の目には、上記の英国船の浦賀来航事件がむしろ日本への宣教開始の第一歩と映った。自著『中国——現状と将来』(China: Its State and Prospects, 1838, London)のなかでは「新約聖書2冊と小冊子などがゴルドン大佐によって日本に運ばれ、江戸の地元住民の手に残された。」と、聖書2冊が日本人の手に渡ったことをことさらに記録している。

メドハーストは同じロンドン伝道会の一員としてバタビヤに渡る前からモリソンとミルンの上記の決議を知っている。バタビヤにいる彼は志が高く、その視線の先は常に台湾、日本、朝鮮半島にあって、日本伝道への志を心に抱いていたものとみられる。しかしながら、彼は日本を知るための

資料を何も持ち合わせていなかった。

鎖国下の江戸時代において、和書の海外流出は基本的に長崎を中心に行われ、貿易を許された清国とオランダへと二つのルートが想定される。もちろん、朝鮮、琉球が通信使による三つ目のルートもあることを忘れてはならない。ただ、その目的は一様ではなく、東アジアの清国や朝鮮へは、長い歴史の交流と相互理解があった。ただし、あくまで漢字文化圏で共通する漢文で書かれた書物が流通しあって、直接それぞれの国の読書人が読めることが必須条件である。清の『四庫全書』にも収められた日本人によって書かれた漢籍(太宰春台『古文孝経孔氏伝』、山井鼎『七経孟子考文補遺』)などがそれを象徴的に物語っている。それに対して、ヨーロッパへの和書流出はどちらかという、日本または日本語という未知の世界への認識から生じたものであって、漢籍の和解をはじめ、挿絵の豊富な『訓蒙図彙』や節用集などの辞書類、そして文芸や歴史書など、ありとあらゆる範囲にわたって日本を知ろうとするのが特徴である。その意味で中国や朝鮮よりもさまざまなジャンルの書籍が欧州に流出したと言えよう。もちろん日本はそれを主体的に推し進めたものではなく、むしろ鎖国下の情報統制のために書籍の流出を防止することもしばしばあった。事実、ヨーロッパ向けでは、多くは個人による私的な持ち出しであって、公的な書籍輸出は非常に少なかった¹⁾。

バタビヤは17世紀以来、オランダ東インド会社のアジアにおける本拠地として、日本とオランダとの通航の中継点であった。1827年2月、いつも通りの航路、いつも通りの季節に長崎の出島からオランダへ向かう船がバタビヤに接岸した。数人のオランダ人の紳士が下船して二三ヶ月の休養を経てオランダへ向かう予定であった。この地にやってきて5年目を迎えたメドハーストにとってまさに「渡りに船」、ようやく日本語と接する

1) 山脇悌二郎『長崎のオランダ商館』(中公新書579, 1980年6月)ではオランダからの輸入書籍を挙げていたものの、日本からの輸出が挙げられていない。

チャンスが訪れてきたのである。モリソンとミルンの日本伝道決議の10年後だった。

メドハーストは彼らから日本の書籍を借り出し、辞書などを始め、十数種の書物を、中国人十数人を雇って写して副本を作った。そこから勉学に励み、3年後の1830年に世界初の『英和和英語彙』を編集し、自らの手で刊行に漕ぎつけた。それを皮切りに、『福建方言字彙』(1832)や『朝鮮偉国字彙』(1835)や『華英・英華字典』(1842-48)など、生涯6種類の対訳辞書を編集することとなった。その全体像については、陳(2017)が紹介していて、伝道への架け橋という彼の辞書編集の強い目的意識が見えてくる。

ただし、この最初の辞書編集は並み大抵の努力では成し遂げられるものではなかった。その序文で本人が当時の様子を振り返っている。

「日本にかつて滞在したこともないし、日本人と語る機会にも恵まれなかった。しかし、日本からの数人の紳士のご好意により、何冊かの日本の書物—とりわけ日中両文字を併用した書物—を披見し得たので、編者は中国語の知識を用いて以下の単語表を編纂することができた。」と、オランダ人との出会いによって、日本語で書かれた書物に接することができたことが記される。そして、「編者は日本人の手になる入手しうる最上の著作物に厳密に従った」とあるように、日本で流布している確かな書物を底本に選んでいることが窺える。しかし、その辞書について、加藤知己・倉島節尚編著(2000)では「言語資料としての性格については今ひとつ分からないことが多く、使えない難点が残っている。なぜなら、そもそも日本からの「数人の紳士」とはどういう人なのか、底本として使用された日本の文献が、どういう物であったかがわからないからである」とする。

2. 「数人の紳士」なる人物は誰か

日本では、長崎洋学史研究で知られる古賀十二郎(1947: 40-41頁)はこ

の研究に先鞭をつけている。彼は主に前記のメドハーストの著書『中国——現状と将来』をもとに以下の情報を得ていた。

まず、1827年にメドハーストはある人物から日本の図書を借覧する機会を得た。それを好機とばかり10人ほどの中国人を雇い筆写に努めた。そして、その最も重要なものは、次の辞書であった²⁾。

- (1) 蘭漢字書 日本人たちの手書せるもの
- (2) 和漢蘭字書 イロハ順に編修せるもの
- (3) 漢和字書 二部或は三部
- (4) 和漢字書 イロハ順に編修せるもの。武具、道具、他の挿絵が附けてあり、一つの百科全書の如き者であった。

其外、四書(日本語にて解釈したもの)、歴史小説、医学、植物学、鉱物学、歴史、統計等に関する日本人の著述などもあった。

その後の研究者は基本的に上記に沿って様々な検証や推測をしていた。たとえば、杉本つとむ(1985)では前出の「何冊かの日本の書物」についてより具体的に(1)について蘭和辞書の『ドゥーフ・ハルマ』または『訳鍵』などを推測しながら、結局のちに両方の可能性を否定していた。(2)についてとくに和蘭辞書の『蘭語訳撰』を挙げていた。ほかに(4)について『訓蒙図彙』(増補版も)、また『早引節用集』の類だと推測している。八耳俊文(2005)もより詳しく上記のことを敷衍していた。それを受けて陳(2015)では、同じ中津藩で編集された、和蘭辞書の『蘭語訳撰』の姉妹編とされる蘭和辞書の『バスタード辞書』(1822)も参照したことを明らかにした。

2) The most important of the works, appeared to be those on philology; comprising a Dutch, Chinese, and Japanese dictionary, drawn up by the Japanese themselves; a Japanese, Chinese and Dutch dictionary, arranged according to the Japanese alphabet; two or three Chinese and Japanese dictionaries, classed according to the Chinese radicals; and, lastly, a Japanese and Chinese dictionary, arranged according to the native alphabet, appended to which were numerous graphical representations of arms and implements, manners and customs, history and adventures, geography and astronomy, plates, maps, and charts; in short, a complete encyclopedia.

いままでは語学、特に辞書に関するものを中心に検討してきたが、肝心の「数人の紳士」についてはほとんど触れていなかった。たしかに、メドハーストの英文の原書に照らし合わせてみても、それらの書籍の所有者たる名前を明かしていない³⁾。

近年、和書の海外流出、とくに出島のオランダ商館員を通して海外へ持ち出された書籍の研究が進んでいる。スエン・オースタカンプ(2010)「新発見の欧州所在倭学書とその周辺」、奥田倫子(2013)「日本語学者ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン旧蔵日本書籍目録」、鈴木淳(2014)「シーボルト日本書籍コレクション考」『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』、松井洋子など編(2016)『ライデン国立民族学博物館蔵 ブロムホフ蒐集目録：ブロムホフの見せたかった日本』など、オランダ商館員に持ち出された和書の海外所蔵についての調査報告も増えてきて、研究の基盤が充実してきたと言えよう。

特に注目すべきなのはスエン・オースタカンプがヨーロッパに現蔵している日本の明治以前の資料について、精力的に調査し、一連の研究発表を行ってきたものである。メドハーストの辞書編集に焦点を当てていないものの、随所重要な情報が散りばめられていた。オースタカンプ(2010)は『朝鮮千字文』の流布にかかわり次のように記している。

(書簡)は「Medhurst の An English and Japanese and Japanese and English Vocabulary (1830年バタヴィアにて刊行)の底本を考える上の好資料である。この書簡と似たような内容のものとして、古賀 1966にこの関連で取り上げられている Medhurst 著 China; its state and prospects (1838年刊, 276-277頁)があるが、書簡の方がはるかに詳しい。」また、次のようにも記す。

3) In the year 1827, the author was obligingly furnished with the loan of some Japanese books, calculated to throw light on that important language. As the owner of the books gave full permission to copy them, the author devoted his whole attention to this subject, besides employing a dozen Chinese to assist him in the undertaking.

『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類

「『蘭語訳撰』を Vocabulary の主な底本とする杉本説(杉本 1989: 210 など)から期待される通り、『蘭語訳撰』としか解釈できないものの記述が見られ、更に英和・和英辞典の編纂過程での役割を物語る「I have translated all the Dutch words into English, making an index of the whole, according to the English alphabet」という発言もある。しかし、『訳鍵』にあたるものもあるし、玉篇類と節用集類の字書・辞書も1827年の諸資料に含まれていたことがわかる。」

したがって、メドハーストの『英和和英語彙』に利用された書物について、本人の書簡に含まれる情報量が前記の著書『中国——現状と将来』よりずっと多く、しかも1827年7月20日の書簡がロンドン伝道会の雑誌に記載されている。

さらに、「数人の紳士」についても、オースタンプ(2010)では、ほぼ目星が付いたということになる。つまりその日本の書籍の持ち主が「候補として最も有力なのは1823年 Siebold と共に来日し、その後1826年末までオランダ商館長を務めた Wilhelm de Sturler であると思われる。」と推定している。

その理由として、まず当時の宣教関係やアジア関係の雑誌などに類似した記事を踏まえて、1827年1月にバタビヤに向かって出帆した Sturler と、時期的に Medhurst の述べているところによく合うことなどが挙げられる。前者についての雑誌記事がいくつかあり、和書を貸し出した人物についての情報も若干含むのである(American Tract Society 1837: 70)。後者については、1827年2月にメドハーストは『千字文』をオランダ人であろう人物から借りて書き写す機会を得たことがわかる。さらに Sturler の蔵書の中に『千字文』があったことは19世紀後半に活躍していたフランス人東洋学者の Léon de Rosny (1837-1914) の著作からも窺えるところから、Medhurst 『朝鮮倭国字彙』(1835)の版心『朝鮮千字文』とあるのは Medhurst が勝手につけた題名ではなく、原作に従ったことが分かる。つまり、メドハース

トの利用した『千字文』がそもそも Sturler の蔵書であることを突き止めたことで一層両者を結びつける信憑性が増してきたのである。

しかし、実際にオースタンプ (2010) ではその書籍の持ち主を Johan Willem de Sturler と断定的に示し得ていない。そもそもメドハーストの著書にも書簡 (20 July 1827.) にも Sturler 商館長の名前が出てこないからである。

それを決定づけたのはロンドン伝道会の印刷事業について 600 ページ近くの大著をまとめた蘇精 (2014) 『鑄以代刻-傳教士與中文印刷変局』であり、メドハーストの印刷出版について三章を割いて詳細に論じている。それらを通してメドハーストの辞書編集にかかわる日本の書籍と人物の様子が徐々に見えてきたと言えよう。とりわけメドハーストの利用する書籍の研究に寄与するところが随所見られる。同じく書簡などの第一級資料を用いてさまざまな新発見、新視点を提供している。そこにはメドハーストがステュルレルの持ち出した日本の書籍を写したことを触れている⁴⁾。その根拠は、つまり下記のように、メドハーストの 2 年後の書簡 (Council for World Mission: London Missionary Society (LMS): Ultra Ganges, Batavia-Incoming Leteers., 3. B W. H. Medhurst to the Directors, Batavia, 22 July 1829.) に次の記述があったからである。

and more particularly to Colonel De Sturler, late chief of the Dutch Factory in Japan, for having given the whole box of his books over into our hands, to copy from, and do what we would with for months together. (特に、前任のオランダ商館長 Colonel De Sturler 大佐が、自分の本を箱ごと私たちの手に渡してくれて、複写させることを許してくれた。それで私はみんなと一緒に何ヶ月も転写していた。)

4) 蘇精 (2014) に“麦都思 1827 年 7 月 20 日致伦敦传道会书简中提到 1827 年 2 月从前长崎商馆长狄斯特 (Colonel De Sturter) 处借予一批日文书籍, 他雇用 12 名华人在数月内抄录 8 种日荷, 日中等双语字典及其他图书。”(99 頁) とある。

したがって、オランダ商館員による西洋への和書流出はほとんどバタビヤを経由し、直接欧州まで持ち帰ったものだが、途中バタビヤにいるロンドン伝道会の宣教師にも手渡され、副本が作られたことがあった。さらに一部ではオランダ商館員を通して直接広東のプロテスタントの宣教師たちに手渡され、新しい勢力として台頭するイギリスとアメリカの日本認識に役立ったことはいうまでもない。

3. どのような書物が写されたのか

—— 1827年7月20日の書簡に基づいて

メドハーストの書簡利用について、早くも河元由美子(2003)では、現在ロンドン大学のSOAS (School of Oriental and African Studies) 図書館が所蔵する Council for World Mission Archive の manuscript 部門に保管されたメドハーストからの報告書や書簡、とくに1827年7月20日付けのものを紹介し、利用していたことを記す。上述のオースタキャンプ(2010)と蘇精(2014)の両研究がともに依拠しているのはメドハーストのロンドン伝道会宛ての書簡 (Council for World Mission: London Missionary Society (LMS): Ultra Ganges, Batavia-Incoming Leters., 2. D W. H. Medhurst to the Directors, Batavia, 1827. 7. 20) である。その所在と利用についていままでも強調されてきたが、結局、具体的な「紳士」たる人物と転写された書名についてわからないままであった。

本稿はメドハーストの書簡をもとに、『英和和英語彙』に利用された書籍の同定とその編集のプロセスについて再考を試みることにする。

3.1 書簡にある記述の翻訳

前述のように、オースタキャンプ(2010)の注記にその(1827. 7. 20)書簡の英語原文が翌年の『福音雑誌と宣教師記事』(*The Evangelical Magazine and Missionary Chronicle* 6 [Missionary Chronicle for January, 1828] p. 29-31)に全文を掲載されているという情報がある。現在 google books でも確認できる⁵⁾。こ

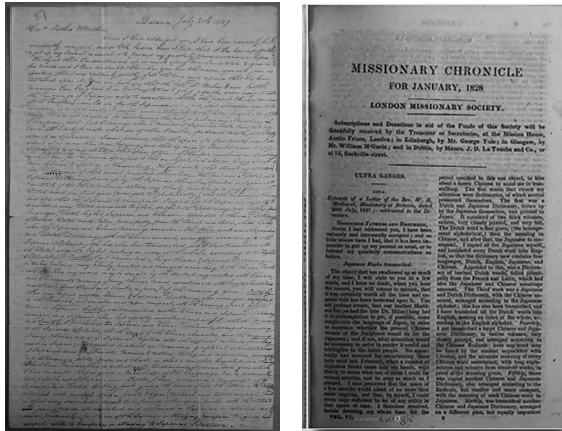


図 1 左はロンドン大学 SOAS に所蔵している手書きの書簡原本、
右は翌年の雑誌に載せる活字による印刷体。

れは書簡にいくつかの文言の改訂を経て編集された一種の定期的な近況報告で、冒頭の 6 行ほど除けば、主に「Japanese Books transcribed (日本の書籍の転写)」と「State of the Mission (ジャワでの布教状況)」と原書簡にない小見出しをつけた二つの部分によって構成されている。本稿はむしろ前者のみを資料として用いている。

Japanese Books transcribed の冒頭ではまさに前述した 1817 年にモリソンとミルンが連名して日本布教の必要性を決議したことに共鳴するように、メドハーストが次のように書いている。

You are perhaps that the late Dr. Milne & our brother Morrison have long had it in contemplation to get if possible some insight into the language of Japan, in order to ascertain whether the present Chinese version of the Scriptures would do for the Japanese, and if not, what alteration would be necessary in order to render it useful and intelligible to the latter people. No

5) <https://babel.hathitrust.org/cgi/pt?id=hvd.ah6lt6&view=1up&seq=39>

opportunity had as yet occurred for ascertaining this fact, or making any alterations, if necessary (モリソン兄弟が(故ミルン博士と同様に)、可能であれば日本の言語を理解し、現在の中国語版聖書が日本人に合うかどうか、合わないとすれば日本人にとって有用で理解しやすいものにするためにはどのような変更が必要かについて確認することを長い間考えていたことは、おそらくご存知であろう。)

この1827年7月20日に書かれた書簡によれば、まずモリソンとミルンの触れた漢訳聖書が日本でどれほど通用しているかに関心を示し、そして同年の2月に日本からのオランダ人からいくつかの書籍を手にしたときまでは、そのことを考えられなかった。いまそれらの書籍は自分の手元にあり、自由に写したり、参照したりすることができるため、日本語学習を始めようとしたという。

そしてメドハーストの入手した書籍は、辞書類とその他の図書と基本的に二つの部分からなっているが、本稿では紙幅の関係上、主に辞書類に着目する。その他の図書については、別途取り上げようと考えている。

以下に本文を挙げ、その後に試訳を付す。

I therefore resolved, beside devoting my whole time for the period specified to this one object, to and also on hire about a dozen Chinese to assist me in transcribing. The first works that struck my attention were dictionaries, of which several presented themselves. (そこで私は、この目的のために定められた期間中、すべての時間を費やすことに加えて、10人ほどの中国人を雇って書き写しを手伝ってもらうことにした。最初に目についたのはいくつかの種類の辞書であった。)

The first was a Dutch and Japanese Dictionary, drawn up by the Japanese themselves, and printed in Japan. It consisted of two thick volumes, octavo, very closely printed, and very full. The Dutch word is first given, (the arrangement alphabetically), then the meaning in Chinese, and after that, the

Japanese to correspond. I copied all the Japanese myself, & translated every Dutch word into English, so that the Dictionary now contains four languages, Dutch, English, Japanese and Chinese. (1点目は、日本人自身が作成し、日本で印刷した「蘭和辞書」である。それは2冊の分厚い八つ折りの本で、非常に丁寧に印刷されており、とても充実した内容だった。見出しのオランダ語が最初に示され、(アルファベット順に配列されている)次に中国語の意味が示され、その後さらに対応する日本語が示されている。日本語はすべて自分で写し、オランダ語は全部英語に翻訳したので、すると、オランダ語、英語、日本語、中国語の4言語で構成される辞書となった。)

Appended to this was a Dictionary of Bastard Dutch words, taken principally from the French and Latin, which had also the Japanese and Chinese meanings annexed. (これに加えて、(2点目としては)主にフランス語とラテン語から抜粋した「バスタード辞書」があり、それにも日本語と中国語の意味が併記されていた。)

The Third work was a Japanese and Dutch Dictionary, with the Chinese annexed, arranged according to the Japanese alphabets; — this has also been transcribed, and I have translated all the Dutch words into English, making an index of the whole, according to the English alphabets. (3点目は、「和蘭辞書」で、中国語も併記されており、日本語のイロハ順に配列されている。私は、これも転写し、オランダ語をすべて英語に翻訳し、英語のアルファベットに合わせて全体の索引を作った。)

Fourthly, I got transcribed a large Chinese & Japanese Dictionary, in twelve volumes, very closely printed, and arranged according to the Chinese Radicals: — here any word may be found sought by the student acquainted with Chinese, and the accurate meaning of every Chinese word ascertained, with long explanations and extracts from standard works, in proof of the meaning given. (4点目として、私は12巻からなる大規模な漢和字書を書き

『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類

写した。それは非常に精巧に印刷されており、中国の部首に沿って配列されている。ここでは、中国語に精通した学生がどんな単語でも見つけることができ、すべての中国語の正確な意味が確認され、その意味を裏付けるための長い訓注と標準的な作品からの引用が付いている。)

Fifthly, there was copied another Chinese & Japanese Dictionary, also arranged according to the Radicals, but smaller and more compact, with the meaning of each Chinese word in Japanese. (5点目は、別の漢和字典を写した。これも部首に沿って配置されているが、より小さくコンパクトなもので、漢字には日本語の意味が附されている。)

Sixthly, was transcribed another Chinese and Japanese Dictionary, arranged on a different plan, but equally important and useful with the former. (6点目として、異なった配列の漢和辞典を書き写した。前者と同様に重要で有用である。)

Seventhly, I procured two Japanese and Chinese Dictionaries, arranged according to the Japanese alphabet, with the sound of the Chinese characters, and the meaning of every Chinese word in Japanese, together with the different methods of writing used in Japan; — appended to which are numerous graphical representations of Japanese arms, implements, manners & customs, history and adventures, geography and astronomy, plates, maps, and charts, — in short, a complete Encyclopedia thereby. (7点目は、私は2冊の和漢辞書を手に入れた。この辞書は、日本のイロハ順に沿って配列されており、漢字の音、日本語での中国語の各単語の意味、日本で使われているさまざまな書き方が記載されている。—また、日本の武器や道具、風俗習慣、歴史や冒険、地理や天文学などを図解した表や地図などが添付されており、つまり完全な百科事典となっている。)

Thus, I have been enabled to collect eight Dictionaries, of various kinds sorts, from which I have no doubt that as good a knowledge of the language

can be procured as is possible out of Japan. (このようにして、私は様々な辞書を8点集めることができた。これらを通して、可能な限りの日本語の知識を得ることができるかと確信している。)

3.2 和書の同定

この書簡の伝える情報量と、それを持ち込んだ人物とを合わせて考えれば、書籍の同定とその流布の過程についても見直す必要が出てくるのではないかと思う。つまり、メドハーストはステュルレル (Sturler) から書籍を借りて中国人十数人を雇って写した8点の辞書は次の三類となる。

まず、1, 2, 3点を第一類とする。いわゆるオランダ語との対訳辞書である。

最初の1点目を判断する手掛かりは二つあり、一つはオクタボの厚い2冊、もう一つはオランダ語が最初にアルファベット順に並べられていることである。この両条件に合うのは唯一1810年に刊行された『訳鍵』であろう。書誌を詳しく記述した杉本つとむ (1978: 692頁)によれば、「本書は洋風和本で、鋳どめで製本され、左開きで題箋も横書きである。……和装・包背装の2種があって、後者はハードな表紙で一見すると洋本仕立てといってもよい。〈乾・坤〉の2巻2冊からなる」という。時代的に見てもこの規模のアルファベット順の蘭和辞書と言え、『訳鍵』しかないものとする。

いままでの研究史において、板沢 (1940) も古賀 (1947) もこの『訳鍵』を挙げていたが、杉本 (1968) によって否定されただけに、『訳鍵』がどのように利用されたかを検証する必要が出てくる。メドハーストがこの時点において漢字は中国語、片仮名は日本語と認識しているようだから、『訳鍵』にあるカタカナ表記を日本語としてとらえた可能性がある⁶⁾。

6) たとえば、メドハースト『英和和英語彙』の「To tan ナメス (英和 p. 145/和英 p. 244)」「To nibble カヂル (英和 p. 127/和英 p. 207)」は、それぞれ『訳

『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類

2点目の辞書はこの書簡で唯一はっきりと **Bastard** という名前を添えたもので、陳(2015)ではメドハーストが『バスタード辞書』(1822)を利用したことを明らかにした。本来次の和蘭辞書の『蘭語訳撰』(1810)の姉妹編とされるものだが、メドハーストが同じ和蘭辞書として『訳鍵』と同じ類とみなしている。

3点目は「イロハ順に配列」ということから、和蘭辞書の『蘭語訳撰』(1810)であろう。杉本(1968)によって主張された底本の一つであり、事実もっとも多く利用されたものである。前記のスエン・オースタンプ(2010)脚注27では、

また、Sieboldにも『蘭語訳撰』が基礎をなしていることがわかっており、次のように述べているが、1830年のバタヴィア滞在の際、直接 Medhurst から窺った情報と思われる (Siebold 1841: 20 = 吉町 1942 [1977: 193])。「千八百三十年に最博學な Medhurst がバタヴィアで石版にした辞書は、最著名な中津〔Nakats〕【奥平昌高】侯の庇護より江戸市で公刊された日蘭辞書【『蘭語訳撰』俗「中津辞書」1810年】を基礎として構成された。

と述べ、早くもシーボルトがこの底本に言及し、吉町(1942)も日本語で訳していることがわかる。

オランダ語と中国語をマスターしているメドハーストにとっては、上記の三辞書にある漢字語訳を中国語、ルビや片仮名語を日本語と目に映ったようである。とくに唐話語彙の多い『蘭語訳撰』ではなおさらそういう印象をもたらすこととなったのであろう。本書簡の最後のところにも同じ印象を述べている。「日本では、漢字は、非常に省略された形で、あるいは意味を説明するために日本語の文字が添えられている以外は、一般的には

鍵』の「Aftouwen ナメス」, 「knabbelen カゼル」からとったものと思われる。前者について『蘭語訳撰』には「Looyer 革匠ナメシカワヤ」, 『倭節用』には「柔革なめしがわ」とあるから、別形態となっている。後者について『バスタード辞書』と『蘭語訳撰』には収録されていない。

使われていないことがわかった。日本語のアルファベットは47文字で、その中にはドイツ語の文字とローマ字のような2つの形式があり、ほとんどの漢文書物には必ずこれらの形式のいずれか、あるいは別の形式が添えられている。したがって、日本で一般的に役立つ書籍は、この方法で書かれたものでなければならない。」よって、蘭語から英訳すれば、「the Dictionary now contains four languages, Dutch, English, Japanese and Chinese. (辞書はオランダ語、英語、日本語、中国語の四カ国語になった)」わけである。これも前出の古賀(1947)の記述した「(1)蘭漢字書、(2)和漢蘭字書」と合致している。つまり、杉本(1967)がすでに指摘したように、これは漢字を中国語と見なしたメドハーストの初期の認識でしかなかった。いずれにせよ、メドハーストは最初にそれらをもとに英語をアルファベット順に検索できる、オランダ語、日本語、中国語の4つの言語の揃う対照語彙表を作ったことの意義が大きいと思われる。この作業が彼の英和辞書作りの最初の第一歩であった。

次の4、5、6点を第二類とする。いわゆる漢和辞書の類である。

4点目の辞書は部首による配列の12巻からなる大型な漢和字典で、精巧な印刷と多くの注記がポイントとなる。しかも中国語を知っている学生ならすぐに利用できるものとして、まず『増続大広益会玉篇大全』(享保20[1735])が挙げられるであろう。『増註校正頭書字彙』(天明7[1787])もありうるが、冊数(15冊)が合わない。

5点目も部首による小型の漢和辞典で、この時代が数多く刊行されているが、小型で使いやすいものとして、おそらく、『増補字彙画引大成』(1784)、鎌田環斎の『新增字林玉篇大全』(寛政9[1797]序)などが挙げられるだろう。

6点目は部首と異なった配列といえば、イロハ順か意義分類となるであろう。前者で考えれば『雑字類編』の可能性もあるが、イロハ順についてわざわざ次に強調しているため、意義分類のものと考えたほうがより適切

『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類

であろう。『和漢三才図会』や『訓蒙図彙』, または『学語編』の類が挙げられるが, 知名度と図入りの便利さを念頭にいければ, 『訓蒙図彙』の可能性が高くなるであろう。その検証過程は別稿(『訓蒙図彙』の海外流布と利用)『経済研究』236号 2022年3月)に譲る。

最後の第三類は和漢辞書であって, いわゆる節用集の類であろう。

この2点はいわゆる附録付きの大型本節用集のようなものを指すのであろう。「イロハ順に従って配置された」ことから, 『早引節用集』の類も考えられるが, 附録が少ない点で除外されるだろう。具体的にはこの2点については, 異なるタイトルのものでなければ, 総数の8点にはならないので, 19世紀初めの大型節用集『万代節用字林宝蔵』(1806)と『増廣字便倭節用集悉改大全』(1826)が挙げられるだろう。陳(2015)では「さらに, 編集過程において江戸時代の『和漢音訳書言字考節用集』(1717), 『増補頭書訓蒙図彙大成』(1789), 『増廣字便倭節用集悉改大全』(1826)などが日本語の反映として, または漢字表記のより所としてどれほど関与したかを明らかにする」必要があると, 課題を残してきたが, ここにいう附録付きの大型本節用集という制約から, 文字だけの『和漢音訳書言字考節用集』は除かれるものと考ええる。

陳(2017)でも記したように, メドハーストは中国語の力をふんだんに使って次から次へと辞書編集の道を突き進んだ。前出の序文「とりわけ日中両文字を併用した書物」を利用したと説明した通り, 中国語のできるメドハーストにとって, 漢和辞書にしても, 和漢辞書にしても, 漢字を頼りに意味の判断ができるから, それらに英訳を施すことによって日本語の理解の一助となるであろう。

以上のように, メドハーストの写したステュルレルの書物(辞書類)を一応絞ることが出来た。ただ, その反証として, ステュルレルの蔵書にはそれらがあるかどうかを確認する必要がある。

4. ステュルレル蔵書の行方

4.1 ステュルレルの図書収集

『洋学史事典』(1984)の「ストゥルレル」項(永積洋子執筆)によれば、ステュルレル(Johan Willem de Sturler, 1773-1855)はオランダのマーストリフトに生まれる。1815年東インド派遣陸軍下級監督官, 1819年東インド会計検査官兼陸軍司令部付陸軍大佐となる。1823年にシーボルトとともに、同じ船で来日。当時陸軍大佐で前任者ブロムホフ(J. Cock Blomhoff)のあとをうけて出島のオランダ商館長となる。在任中(1823. 11. 20-1826. 8. 5)シーボルトとはげしく対立し、総督に対しシーボルトに不利な報告をした。1826年シーボルトを伴って参府した。貿易改善には力を注いだが、厳格に過ぎてその目的を達成することができなかった。また協荷貿易を嚴重に取締ったが、これは彼自身、私貿易で利益をあげるのが目的だったため、商館員とはげしく反目した。荷倉役フィッセルと、ステュルレルは、それぞれ相手を非難する手紙を東インド総督に提出した。1826年長崎商館長に任命されたメイランは、この両者の対立について調査し、ステュルレルの行為は個人の利益をあげるためであったとして、彼の主張を斥けた。のちシーボルト事件がおこりその処分が決定されると、彼に対しても監督不届で日本への再渡禁止が伝えられたとある。

文政9(1826)年の末に日本を離れて翌年2月バタビヤに帰る。1827年5月27日にライデンに到着した。それによってステュルレルがバタビヤに二か月ほど滞在したことがわかる。この間においてメドハーストが一生懸命に書籍の転写に励んでいたことになる。

下記の図は文政9年5月7日(1826. 6. 12)江戸参府の帰途、大坂で芝居を見た際のものである。中央は捻挫した商館長ステュルレル。右がビュルゲル。左側の黒い服を着た人物がシーボルトで、観劇の体験は『日本』第2版(前項)に記されている。

『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類



図2 鶴岱筆「於浪華觀紅毛人」(国立国会図書館所蔵)

鈴木淳(2014)の研究では、彼らの書籍はほとんど江戸参府の際に入手したと考えられる。となると、江戸参府の際、さまざまな人物と会ったことがまず注目される。

中津藩の藩主奥平昌高との交流が商館長ドゥーフの時代(1803-1817)から続いてきたもので、ステュルレルが文政9(1826)年の春にシーボルトらとともに江戸へ旅立ち、北部九州を横断したときにも中津藩に立ち寄った。また、江戸へ向かう際、品川まで出迎えに行ったのも中津藩の者であった。そのために、中津藩の藩主の名前で江戸で出版された『蘭語訳撰』(1810)と『バスタード辞書』(1822)を入手することはそれほど難しくなかったものと想定できる。

そして、高橋景保との交流も知られている。小沢栄一執筆の「郎察国王ボロウルボン氏世系 附ボナパルテ伝」(『洋学史事典』)によれば、実際に高橋景保の聞書『丙戌異聞』(『勃那把爾帝始末』)はオランダ商館長のステュルレルからの聞書であって、高橋景保がステュルレルを訪ねた日時も「四月四日夜雨質問」という。また静嘉堂文庫大槻本『佛霖新聞』に「文政九年丙戌四月和蘭甲比丹ステュルレル対話筆記」とある。後述するよう

に、高橋景保からステュルレルへ図書や地図などを送っている。

4.2 ステュルレルの図書所蔵状況

ステュルレルが死去して間もなくの1855年ころ、息子の Willem Louis de Sturler (1802-1879) が旧蔵書をライデンとパリの二か所に寄贈したことが知られている。

杉本(1989: 107頁)にも彼の蔵書について次のように触れている。「ホフマンの場合、クルチウス『日本文法試論』(*Proeve eener Japansche spraakkunst*) (1857)の〈緒言〉で1824-26年まで商館長として滞在したJ. W. デ・ステュルレル Sturler が、〈非常に有益な日本の書籍を数多く収集し、これを日本語研究のために、子息のW. L. デ・ステュルレル氏が贈呈してくれた〉とも書いている。」よって、ステュルレルの蔵書は最終的にライデン大学のホフマン教授の手にわたり、現在その一部はライデン大学の所蔵となっている。

幸いなことに、奥田(2013)「日本語学者ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン旧蔵日本書籍目録」はまさにホフマン蔵書についての研究であり、その説明によると、「表紙又は裏表紙、見返し、表題紙に“E collection equites J. W. de Sturler”と記載され、併せて「No.」を付したアラビア数字が記載されている」ものがあり、それについては、「記載された内容から、1824年から1826年まで出島の商館長だったヨハン・ウィルヘルム・デ・ステュルレル (Johann Wilhelm de Sturler, 1774-1855) の遺品であることが明らかである。この識語を持つ資料は大学図書館に約40点ある。デ・ステュルレルが収集した日本書籍はフランス国立図書館でも所蔵しているが、同館の所蔵資料にも同様の識語が見られる」という。

さらに、その蔵書の経緯について、「ステュルレルの遺品中の書籍はまずホフマンの元に送られ、ホフマン手持ちの他の書籍と同じ場所でしばらく保管された後、ホフマンが手元に残さなかったものがフランス国立図書

『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類

館へ贈られたと推察できる。ホフマンの選書は控えめで、冊数としてはフランス国立図書館に送られたもののほうが多い」と説明している。

ここで、まず奥田(2013)の目録に沿って、メドハーストが借り写した順に照合してみることにする。

B36 『蘭語訳撰』 NIEUW VERZAMELD JAPANS EN HOLLANDSCH
WOORDENBOEK (1810) Ser. 59*⁷⁾

B37 『訳鍵』 (1810) Ser. 61

B38 『バスタール辞書』 NIEUW-GEDRUCT BASTAARDT WOORDEN-
BOEK (1822) Ser. 60: 1/2

つまり、“E collectione equites J. W. de Sturler”の識語が第一類の対訳辞書三種にあり、すべてステュレルの蔵書と確定できる。

しかし、第二類の漢和字典については、下記の三点はホフマンのリストにはあるものの、“E collectione equites J. W. de Sturler”の識語がない。

A24 『天明新刻 増補字彙画引大成』 (1784) Ser. 31

A25 『改正倭玉 真艸字引大成』 (1820) Ser. 32

A26 『増続大広益会玉篇大全』 (1780) Ser. 33

のA26はメドハーストが4点目として写した大型の12冊からなるもので、ここでの注記はVan der Capellenの蔵書となっている。5点目の小型な部首索引の漢和字書はA24かA25のいずれであろう。対して、6点目の意義分類の漢和字書は、下記のA52にSturlerの識語があり、メドハーストが確実に利用したものである。

A52 『頭書増補訓蒙図彙』 (1789) Ser. 2a

第三類の和漢辞書の節用集としては、まずSturlerの蔵書として次のものが挙げられる。

7) Ser. はライデン大学所蔵の日本語関係書目録, L. Serrurier, *Bibliothèque Japonaise: Catalogue raisonné des livres et des manuscrits japonais enregistrés à la Bibliothèque de l'Université de Leyde* (Leiden: E.J. Brill, 1896).の略称である。

A51『万代節用字林宝藏』(1806) Ser. 6

バタビヤでメドハーストが写した一冊だと考えられる。しかし、もう一冊については推測しがたく、ホフマンの蔵書には、次のものがある。

B50『新撰増益 都会節用百家通』(1819) Ser. 12

Van der Capellen; Balfort からの由来という注記がある。しかし、実際に『英和和英語彙』と照らし合わせても、一致しないものが多い。

そこでステュルレル蔵書のもう一つの収蔵先、フランス国立図書館に目を転じると、小杉(1992)による和書の受け入れ情報についての詳しい研究がある。フランス国立図書館にある1855年8月29日に受入の、J. W. de Sturlerの蔵書の一部(版本59冊、地図25点、浮世絵257点)がある。小杉(1992)ではその一覧(58.から94.までの37点)を挙げているが、辞書類が少なく、前記したオースタキャンプ(2010)で取り上げた『朝鮮千字文』はまさに「Wilhelm de Sturler 贈され Japonais 369 という整理番号で現在までなるものが同図書館で所蔵されている(小杉1992: 96参照)」ことが確認できる。また前述の高橋景保からステュルレルに贈られた下記の地図2点が所蔵されている。

87. 新訂万国全図 高橋景保 無刊記 銅板筆彩 16枚 改装1冊
Japonais 1201

<注>文化七年序(1819) [N.f.c. 4925]

88. 坤輿図説 南懷仁[Ferdinand Verbiest]纂 Chinois 1923B

北京 康熙十三年刊(1674)一枚(65×181cm) [N.f.c. 2212(2)]

<注>W. H. Medhurstの英訳書書入あり。旧蔵者高橋景保から
J. W. de Sturlerへ文政九年四月付の献辞あり。

後者の88.「坤輿図説」にはメドハーストによる書き入れがあることは、ステュルレルとの直接交流を物語っている。そして、この地図をイエズス会士の南懷仁が描いたことを知っていたとも考えられる。

さらに、メドハーストに関係するものとして、1829年2月にバタビヤ

『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類

で会ったフィッセルの蔵書目録が挙げられる。小杉(1992)によると、次のようである。

1856年11月3日受入, レオン・ド・ロニー Léon de Rosny⁸⁾より購入:

99. J. F. Van Overmeer Fisscher. Beredeneerde catalogus van eene fraaie
verzaeling Japansche voorwerpen. Japonais 342

Nagasaki, 1829. 写 洋装 1冊 [N.f.c. 1112]

<注>フィッセル自筆稿本。メドハースト W. H. Medhurst 補筆。

ライデン本の副本。スタニスラス・ジュリアン Stanislas
Julien 旧蔵

メドハーストが実際にフィッセルからも借り写した書籍が他にもあるが、それについては別稿に譲る。

さて、問題のもう一冊の節用集について考えると、フランス国立図書館にはシーボルト所蔵の29、『倭節用悉改袋増字』(1818)があることに気づく。たしかに『万代節用字林宝蔵』(1806)と同じく19世紀初頭の出版であるが、国文学資料館の『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』(勉誠出版, 2014)によれば、『倭節用悉改袋増字』は前の絵入附録のみの形しか残ってなくて、本体はどこへ行ったかも分らないと記す。また時期的にはシーボルトがバタビヤでメドハーストに会った際には、すでに『英和和英語彙』(1830)は出来上がっていたので、シーボルトからのものではなかろう。陳(2015)ではもう一冊の節用集について、増補版『増廣字便倭節用集悉改大全』(1826)を候補として考えているが、「文政九年丙戌三月新刻」という江戸参府の時期に出版されたもので、入手しやすいものであるが、なお詳しい検証が必要である。

8) レオン・ド・ロニー(1837-1914)は、フランスの民俗学、言語学、日本学者。

5. おわりに

和書の海外流出について、従来オランダ商館員によるルートが強調されてきたが、ただ、その流れの中で、長らく見過ごされてきたのは19世紀初めにオランダと犬猿の仲にあるイギリスの日本へのアプローチである。とくにロンドン伝道会が布教のために日本を目指そうとする決議のもとで、中国やバタビヤなどにいる宣教師たちが積極的に日本研究のために和書を入手しようとしたことである。

メドハーストはバタビヤでステュルレルから借り写した書物についてもこれまでの議論は詳細を欠き、具体的な書名までは至らなかったものが多い。本稿ではメドハーストが写した近世日本の辞書8点のうち、次の6点が同定できた。

『訳鍵』(1810)

『蘭語訳撰』(1810)

『バスターール辞書』(1822)

『増続大広益会玉篇大全』(1780)

『頭書増補訓蒙図彙』(1789)

『万代節用字林宝蔵』(1806)

『英和和英語彙』における具体的な活用について、まず対訳辞書の『訳鍵』を再検討する必要があるだろう。漢和字書のうち、検証を済ませたのは『頭書増補訓蒙図彙』(1789)であって、残りの『増続大広益会玉篇大全』(1780)が対象となるだろう。そしてもう一冊の小型漢和字書の同定も課題である。和漢辞書の節用集については、『万代節用字林宝蔵』(1806)はもちろんのこと、残る一冊については『倭節用悉改袋増字』(1818)や増補版『増廣字便倭節用集悉改大全』(1826)を視野に入れるつもりである。

以上のように、冒頭のところで倉島節尚(2000)が提出した疑問点「日本からの「数人の紳士」とはどういう人なのか、底本として使用された日

本の文献が、どういう物であったか」については、だいぶ解明できたと思う。メドハーストの書簡の解説によって、『英和和英語彙』の編纂のステップも徐々に判明してきた。まず1827年2月の段階ではオランダ語との対訳辞書を使って、オランダ語から英語への翻訳で英蘭漢和の対照語彙表が整理されてくる。むろん、その「漢」を中国語と認識したメドハースト自身の問題があろうが、「英和の部」が先に編纂されたことは間違いない。それから『蘭語訳撰』、『頭書増補訓蒙図彙』、『万代節用字林宝蔵』が意義分類を多用していることを受けて、「英和の部」の前半では名詞を中心とした意義分類を採用し、後半では抽象語261、形容詞736、動詞1599、前置詞32の2628語が、それぞれアルファベット順に並べられている。しかもそれは英和の部4948語の53.1%も占めている⁹⁾。つまり、1827年当初英語アルファベット順に並べられたものを援用する形となった。

「和英の部」の編集の必要を報告したのは翌年の1828年7月22日の書簡であった。

The translations from the Chinese into Japanese, particularly the four books, I found comparatively easy, and read a large portion of them; but the original Japanese books were not so readily decyphered. One difficulty arose from the Japanese dictionaries not being alphabetically arranged throughout. To remedy this, I resolved to rearrange them. This work is half done, and will, I hope, soon be completed. Though I may be able to make out original Japanese books, and even to read them with facility; yet, it will be scarcely possible to gain a perfect knowledge of the language, much less to write in it, or translate into it, without having intercourse with the people, hearing their pronunciation, and being enabled to judge of their phraseology and style. (中国語から日本語への翻訳、特に「四書」は比較的簡単で、かなりの部分を読

9) 拙稿「『訓蒙図彙』の海外流布と利用」『経済研究』236号、2022年3月

んだが、日本語の原書はそれほど簡単には解読できなかった。苦労した点は、日本語が全体的にアルファベット順に並べなかったことである。これを解決するために、私は日本語を並べ替えることを決めた。この作業は半分終わっていて、すぐに完成すると思う。

そして最終的に辞書編集の山場を迎えたところで、やはり日本語の読みの問題がクローズアップされる。それは1829年3月フィッセルがバタビヤに持ち込んだローマ字本の『ドゥーフ・ハルマ』によってローマ字表記を決定づけたと考えられるため、別稿に譲ることにする。

こうして、文字通りに蘭学から英学への転換を果たしたのはバタビヤに
いるメドハーストの『英和和英語彙』(1830)であった。二十数年後に、それは漢学・蘭学に通じたフランス語学者の村上英俊によって『英語箋前篇』(英和の部, 1857), 『英語箋後篇』(和英の部, 1863)の名で和刻され、
ようやく日本へは上陸した。

【参考文献】

- 板沢武雄(1940)「和魯通言比考について」『学鏡』44巻4号, 昭和15年4月号
大崎明子(2004)「メドハーストの『英和・和英語彙』に関する研究」『辞書遊歩
—長崎で辞書を読む—』園田尚弘, 若木太一(編)九州大学出版会
奥田倫子(2013)「日本語学者ヨハン・ヨーゼフ・ホフマン旧蔵日本書籍目録」『書
物・出版と社会変容』14
加藤知己・倉島節尚編著(2000)『幕末の日本語研究 W. H. メドハースト英和・
和英語彙—複製と研究・索引—』三省堂, 平成12年
河元由美子(2003)「メドハーストの『英和和英語彙集』—その利用のされかた
—」『英学史研究』第36号
古賀十二郎(1947)『徳川時代に於ける長崎の英語研究』九州書房, 昭和22年
小杉恵子(1992)「パリ国立図書館における18-19世紀収集和古書目録稿—ティ
チング・シーボルト・ステュレル・コレクションを中心として—」, 『日
蘭学会会誌』第17巻第1号(通巻第33号)
スエン・オースタカンプ(2010)「新発見の欧州所在倭学書とその周辺」日韓言語
学会会議—韓国語を通じた日韓両国の相互理解と共生—, 麗澤大学, 2010

『英和和英語彙』(1830)の編集に用いられた近世日本の辞書類

年 11 月 13 日

- スエン・オースタカンブ (2014) 「ビュルガー・コレクションに関する若干の覚書」『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』勉成出版, 2014 年
- スエン・オースタカンブ (2015) 「シーボルトの朝鮮研究——朝鮮語関係の資料と著作に注目して」『国際シンポジウム報告書「シーボルトが紹介したかった日本』国立歴史民俗博物館, 2015 年 3 月 31 日
- 杉本つとむ (1967) 『近代日本語の新研究』桜楓社, 昭和 42 年
- 杉本つとむ (1978) 『江戸時代蘭語学の成立とその展開』早稲田大学出版部 (第三卷, 昭和 53 年)
- 杉本つとむ (1985) 『日本英語文化史の研究』八坂書房, 昭和 60 年
- 杉本つとむ (1989) 『西洋人の日本語発見: 外国人の日本語研究史 1549~1868』創拓社
- 鈴木淳 (2014) 「シーボルト日本書籍コレクション考」『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』勉成出版
- 蘇精 (2014) 『鑄以代刻 — 傳教士與中文印刷變局』台大出版中心
- ダン・コック (2014) 「フィッセル蒐集の狂歌本」『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』勉成出版
- 陳力衛 (2015) 「メドハースト『英和和英語彙集』(1830)の底本について」『日本語史の研究と資料』明治書院, 2015 年 3 月
- 陳力衛 (2017) 「辞書は伝道への架け橋である——メドハーストの辞書編纂をめぐって」『キリシタンが拓いた日本語文学』郭南燕編著, 明石書店, 2017 年 9 月
- ピーター・コーニツキー (2018) 『海を渡った日本書籍』平凡社
- フォラー, M. (2001) 「フィッセル・コレクションの真実」週間朝日百科『世界の文学』84 号, 朝日新聞出版
- 松井洋子, マティ・フォラー, 人間文化研究機構, 国立歴史民俗博物館, ライデン国立民族学博物館 編 (2016) 『ライデン国立民族学博物館蔵 プロムホフ蒐集目録 プロムホフの見せたかった日本 (日本語)』臨川書店
- W・ミヒエル (2006) 「中津藩主奥平昌高と西洋人との交流について」『人物と交流 I』中津市歴史民俗博物館分館村上医家史料館資料叢書 V, 中津市, 2006 年 3 月。
- 八耳俊文 (2005) 「入華プロテスタント宣教師と日本の書物・西洋の書物」『或問』9 号, 白帝社
- 吉町義雄 (1977) 『北狄和語考』笠間叢書

- Stefan Kaiser (1995) *The Western rediscovery of the Japanese language v. 1. Introduction / An English and Japanese and Japanese and English vocabulary* / W. H. Medhurst. / Curzon Press. 1995
- H. Kerlen (1996) *Pre-Meiji Japanese books and maps in public collections in The Netherlands* 年オランダ国内所蔵明治以前 日本関係コレクション目録 Neerlandica6)
- Medhurst, Walter Henry (1828) “Extracts of a Letter of the Rev. W. H. Medhurst, Missionary at Batavia, dated 20th July, 1827; — addressed to the Directors”. In: *The Evangelical Magazine and Missionary Chronicle* 6 [Missionary Chronicle for January, 1828]: 29-31
- Willam Milne (1820) *A Retrospect of First Ten Years of the Protestant Mission to China. 1820.* (《新教在華傳教前十年回顧》『馬礼遜文集』大象出版社, 2008)
- L. Serrurier (1896) *Bibliothèque Japonaise: Catalogue raisonné des livres et des manuscrits japonais enregistrés à la Bibliothèque de l'Université de Leyde* (Leiden: E. J. Brill, 1896)

【謝辞】

この研究のきっかけを作ってくださったのは故倉島節尚先生であった。本稿はその一環として先生に報告したいと思っている。また、筆者は先行研究を手掛かりにロンドン大学の SOAS へ調査に赴こうと思っていたところ、2015 年 12 月に香港中文大学で王宏志教授の主催する翻訳史のシンポジウムに参加し、蘇精氏と知り合うことができた。資料収集について相談したところ、ロンドンへ行かなくても香港浸会大学にも Council for World Mission Archive のマイクロフィルムがあるとの教示を得た。そこで香港浸会大学で関係部分のコピーをマイクロ写真版から入手したものの、筆記体であるうえに文字がつぶれてとても判読できるものではなかった。2016 年 1 月には、蘇精氏から大著『鑄以代刻—傳教士與中文印刷變局』を送っていただいた。そして日文研の郭南燕先生の研究班「キリシタン文学の継承：宣教師の日本語文学」に参加し、2016 年 9 月にメンバーの石上阿希氏の海外資料調査に依頼して SOAS にあるメドハーストの書簡の写真を手に入れることができた。びっくりと書かれたメドハーストの英語に時間を要していたところ、蘇精氏から上記の 1827 年 7 月 20 日の手紙を含め、翻字された何通かのメドハーストの書簡を送っていただいた。2017 年のクリスマスの夜で、最高のプレゼントとなった。なお、ホフマンの蔵書について奥田倫子氏から丁寧にご教示いただいた。ここに記して皆様に謝意を表したい。

(本研究は JSPS 基盤研究 (C) (20K00635) による研究成果の一部である)